

第3章

「政府」への模索

——「外来王」の変遷——

はじめに

海洋からの移民で始まる起源神話が、南太平洋の島嶼国家フィジーでは広く知られている。植民地以前の大首長国間の不断の戦いの時代には、フィジーやトンガの海域を、30メートルの長さをもつダブル・カヌー（ルア）（Clunie [1977], p. 21, plate9）に200名の兵士を乗せて船団を組み、2000名の軍隊が200キロを超える移動を実行していた。現在では大型カヌーの製造技術は、わずかに博物館のプロジェクトのために発掘されるだけであり、遠洋航海技術は忘れられている。300以上の島々からなるフィジーでは、現在ボートと船外機がなくてはならぬ交通手段となり、島民は海中に刺した杭をたよりに浅瀬を避けて、近くの島々と往来している。遠方への移動は専ら飛行機やフェリーに頼っている。航海に関する技術は大きな変化を受けたが、海の民（カイ・ワイ）と陸の民（カイ・ヴァヌア）、すなわち征服者である外来の首長と被征服民である土地の民の二分的な社会構造は、「伝統的」首長を頂点に頂く典型的なフィジー系住民の村落にいまだにみられる。そこでは「外来王」たる首長と戦士および大工の3マタンガリ（祖先を同じにする親族集団）のグループ、そして土地の首長を中心とする3マタンガリのグループが統合されて一つの社会を構成する。土地の民（カイ・ヴァヌア）は先住民で、後から来た

首長の「靈力」(マナ)に打たれて統治者として迎えたという伝説が語り伝えられている。フィジーでは首長は一方的な征服者ではなく、伝統的に土地の民が首長を即位させる権利をもっている。即位式には外来の荒ぶる首長を一度「殺害」し、恩恵的な土地の神として「再生」・統合させる過程が含まれている⁽¹⁾。その過程は、即位式以外でも、高位の首長を迎えたときに現在も頻繁に行われている訪問・歓迎儀礼に繰り返し現出する。

「外来王」は、外なる「海」から統治能力をもって到来する。その能力をもつ者は、伝統的には神の「威力」(マナ)を備える大首長であった。近代になると「外来王」の内容は大きく変化し、武力と近代的な統治手段の知識をもつ大英帝国の植民地政府の総督をはじめとする文字どおり文化を異にする「外来者」たちを指すことになった。その意味では伝統的な首長たちは「内在化した外来王」であると考えられる。その後は、植民地政府の役人たちの「力」の源であると考えられた英国本国のオックスフォード大学への留学を果たしたフィジーの若い高位の首長が、さらに近年は太平洋島嶼国家の開発政策と同調する政策が組まれるキャンベラやウェリントン (Hau'ofa [1987], p. 4)にある大学への留学者が政府の役職に就いて、リーダーシップ(=統治力)を発揮しはじめている。

本章では、フィジー人の「統治体制」(マタニトゥ)⁽²⁾に関する概念と実態が「海」との関係で如何に変遷してきたかを検討する。神話時代では「海」から来た「外来王」が即位式によって「土地の神」(=首長)として統合されて、首長を頂点とするフィジーの統治体制が成立した。それ以後今日まで、英国の植民地政府の役人から、フィジー人兵士としての海外出兵経験者、そして近年の海外留学経験者まで、常に「海」からの「威力」(マナ)の影響を大きく取り込んだ人々(=「外来王」)によってフィジーは統治・指導されてきた。またフィジーにおける「マタニトゥ」は、諸首長の割拠時代、大首長を盟主とし白人アドバイザーによる憲法を備えた同盟政府の成立、英国への委譲、植民地時代のインド人契約労働者の移入、世界大戦への参戦による国際的認知の獲得、独立(1970年)以前の政党結成と独立後の多民族社会への移行と、

世界的な変化とともにその内容を大きく変化させてきた。そのフィジーの近代・現代の歴史のなかで、伝説時代の「外来王」が姿を変え内容を変えて、如何にその時々「政府」と関わってきたかを考察する。

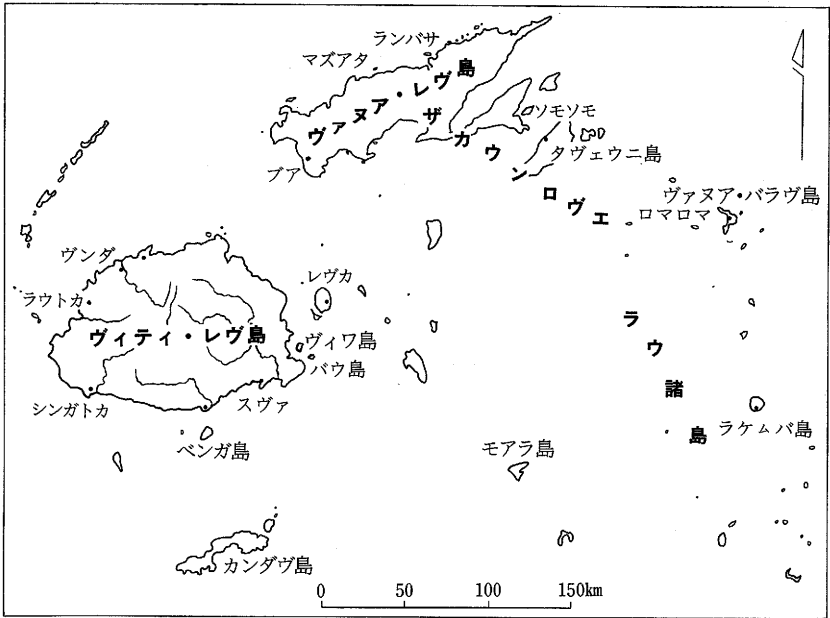
第1節 移民神話と首長の外来性

フィジー人の祖先が「カウニトニ」という船に乗って漂着したという移民神話と、蛇体の神デンゲイに関わる創世神話が、フィジーでは広く知られている。本節では、首長の外来性と移民神話のフィクション性、そしてその移民神話が如何に広まり、受容されていたかを検討する。

1. 移民神話と外来王

フィジー人の祖先は、ナイル川上流のタンガニーカ湖にいたが、隣の部族に武力で押し出され、アフリカから移動した。最初の首長ルトゥナソムバソムバとフィジー人の祖先たちは、カウニトニという船でフィジー近海までたどり着いたときに、海が荒れて遭難し、ヴィティ・レヴ島北西の土地に上陸した。その土地は、「我らが源」(ヴング)と名付けられた。ルトゥナソムバソムバは嵐の最中になくした重要な知識が詰まった箱を海に探しに出たまま行方不明になった。ルトゥナソムバソムバの弟のデンゲイは、内陸を進みナカウヴァンラ山に登って住みついた。ルトゥナソムバソムバには6人の子供がいた。第1子はヴングに残り、第2子(娘)はブレタへ、第3子はパティキへ、第4子はヴェラータへ、第5子はレワへ、第6子はカムバへ行き、ヴィティ・レヴ島東海岸と沿岸地方全領域を治めた(Capell & Lester [1941], p. 324)。彼の子供たちは山を下って六つの地域を征服しヴィティ・レヴ東海岸と沿海地方全域を治めた。第4子(ロコモウトゥ)の血を引くバウ島の首長部族ヴァ・ラトゥは、後に戦士マタンガリに政権を奪取された。以後戦士マタンガリの

図1 キリスト教受容当時の参考地図



首長「ヴー・ニ・ヴァル」(戦いの源の意)がバウ島を統治した。英国の植民地になる前にフィジーを統治し「フィジー王」を名乗ったザコムバウは、フィジーの歴史上最強の「ヴー・ニ・ヴァル」であった。

フィジーの人々には、いまでは以下のような一つの理解がある。自分たちの祖先は皆ナカウヴァンラ山から移動してきた民である。首長階級は後に到来し、先住の民に征服者、統治者として迎えられた。現在も大首長がいる村では、先住の人々と征服者たる首長という二分的な社会構造がみられる⁽³⁾。この二分構造が「外来王」の神話の「真正性」を証明していると考えられている。

2. 首長の外来性

ベンガ島の南側にあるダクイ・ベンガ村では、船で遠征してきた首長が樹皮布(タバ)を右肩から掛けているのを見て、土地の首長たちは自分たちより高位の「威力」(マナ)があることを認め、外来の首長に統治権を譲ったと伝わっている。ほかにもフィジーでは、「自分たちを支配する首長は他所者(カイ・タニ)であると不平を言う」(サーリンズ [1993], p. 105)と首長の外来性が広く語られている。即位式では、その「外来王」が「死と再生」の過程を経て首長として即位する(ホカート [1986], pp. 89-97)。この即位式を通じて「外来の首長=異邦の神」が殺され、ヤングナ(胡椒科の草木)の根から作った(神とされる)飲物を身体にいれ、「土地の神」として再生・統合され、土地に豊穰性を賦与する存在になると想定されている。即位式で渡される1籠の土と鯨齒(タムプア)は統治権の委譲を示す(Nayacakalou [1975], p. 46)。神話では、首長のマタンガリの成員は土地を所有せず、暫定的な所有権を委譲されるだけ(サーリンズ [1993], p. 125)だが、植民地体制下の土地登記の段階で後来の人々も土地の民から譲り受けた土地を確保した⁽⁴⁾。

先の移民神話でルトゥナソムバソムバの弟として登場した、ナカウヴァンラ山に棲む蛇体の神デンゲイは、別の神話ではフィジーの創世神として知られる。この神の神話とともにバウ島を中心にヴィティ・レヴ島東部に一大文化圏が広がっており、「もっとフィジーが国家的に統合されていたら、デンゲイはフィジーのゼウスとなっていたであろう」(Deane [1921], p. 64)と考える研究者もいた。ルトゥナソムバソムバがフィジー民族の祖先を率いてきたという移民起源神話は、植民地時代に発見・採集された。その発見と受容には一国としての統一性が求められた時代の状況が反映されていた。次項では、この移民神話のフィクション性とその受容について検討する。

3. 移民神話のフィクション性とその受容

ここでは「カウニトニ」神話のフィクション性と、その神話が求められていた当時の状況、および今日までそれが継承されている理由を考察してみたい。「カウニトニ」移民神話の出発点をタンガニーカとしているのは問題外である。ポリネシア全域に広まっている移民神話をフィジーにも探したいと願っていたトムソンは、ベンガ島の伝説に祖先がヴィティ・レヴ島西海岸に流れ着いた話があると1892年に報告した(Thomson [1892], pp. 143-146)。報告には首長の名も船の名も記述されていなかった。しかし彼が1895年に英国人類学会誌に載せた論文には、「カウニトニ」に乗ってきた「ルトゥナソムバソムバ」と「デンゲイ」の2人の兄弟の名前が明記された神話になっていた(Tomson [1895], pp. 344-349)。バートンは、1874年に宣教師が収集した資料にも、1894年にヘファーナンが集めた50篇の伝説のなかにもそのような伝説はなかったと、トムソンの報告に反対の意見を述べた(Burton [1910], p. 39)。しかしながらバートンは仏語で論文を書いたため影響力をもち、**「カウニトニ」**神話は今日まで伝わることになった。

「カウニトニ」移民神話の普及には、トムソンのフィジー人書記イライ・モトニゾカが大きく与った。彼は1892年にフィジー語の雑誌『ナ・マタ』(=目)に、タンガニーカ湖にいたフィジー人の祖先が隣の部族に押し出されてアフリカから移動したという、先ほどのトムソンの仮説を載せた。その仮説をミッション・スクールの卒業生が自分たちの祖先の起源として習い、持ち帰り、全国的に広めた。「カウニトニ」移民神話は、フィジー全国を巡って、フィジー人が伝え語る「移民神話」を探していたトムソンの目に1895年に入り、翻訳され、雑誌に掲載され(France [1966], pp. 107-113)、「フィジー人のカウニトニ神話」として普及した。

この神話は、当時植民地経営のため土地の登記作業をしていた英国総督府の調査官によって記録され、マタンガリの土地に対する権利を保証する資料

となった。それが歌にも歌われ、現代まで伝わっている。しかしタンガニーカ起源の部分は一般のフィジー人にも疑問視されている。この移民神話の新たな誕生または「でっち上げ」は、探索者側の要求と自らのルーツを求めるフィジー人側の要求が相まってはじめて可能になった。移民神話と以前から存在すると思われるデンゲイ神話の結合には無理な点があり、ルトゥナソムバソムバとデンゲイを兄弟神にしたてて何とか二つの物語を接合している。しかし問題は、その神話の前半を疑問視しながらも、現在までも受け入れている点にある。ザコムバウが覇権を握り、1874年に英国に委譲した当時には、フィジー人全体を一系統に統合する神話は存在しなかった。キリスト教会による文字教育と、植民地経営による各地域の統合化が進むにつれ、フィジー人が自らを同一の起源をもつ民族として意識するようになり、改変されたこの移民神話を受け入れていった。通部族的な神話の誕生は、英国の植民地体制下で、近代化の影響のもとで、または近代化の結果起こった現象であるといえることができる。

4. 「外来」性の意味するもの

本章では、フィジー人は「威力」(マナ)の源を「外」に求め、「真正性」は「海の彼方」から獲得されるものである、というフィジー人の考えを明確にしようとしている。その考えを知るために、1885年ヴィティ・レヴ本島北部山中プロ地区を中心に起こった「トゥッカ運動」(Sutherland [1910], pp. 51-57/ワースレイ [1981], pp. 25-45)で、主神たる双子の兄弟神が信者に不死の国として約束した海の彼方の島「プロトゥ」の特性が参考になる。

「トゥッカ」とは「祖父母」の意味であり、信者に不死の生と、「祖先の国」(プロトゥクラ)での祖先たちの霊との邂逅を約束した信仰である。この信仰の起源譚として、大洪水の後ナカウヴァンラ山に長男ルトゥナソムバソムバ、次男デンゲイ、三男ワイザラの神話がある。三男は結婚して双子の兄弟を得た。双子が1羽の鳥を取りあって喧嘩をしたので、デンゲイはその鳥を取り

上げた。双子は怒ってその鳥を射殺し、彼に戦いを仕掛けた。結局は双子が負け、謝罪した。デンゲイは、自分の名を知らぬ土地へ行くことを条件に双子を許した。双子は「プロトゥクラ」へ行くことになった。そこでは「悪い行為は禁止されている。もし犯したら、同じ行為で報復される」と父から忠告された。「トゥカ」運動では、このような起源神話が語られていた。

時が経ち、1835年以来フィジー東端から上陸したキリスト教宣教師が、海岸地域の人々を改宗させ、全国的な組織を作り上げていった。1874年には、フィジーは英国の植民地になった。そして、先の双子が神として「トゥカ」信仰を人々に広める時が来た。西洋人に使われていたドゥクモイという男の前に現れて、「教えに従うなら不死の身となることができる。またプロトゥクラにいる祖先と一緒に死後住むことができる」と告げた。彼は名前をナヴォサヴァカンドゥア（一言の意）と改め、10カ月水だけを飲み、双子の神の教えを広めた。

この信仰ではキリスト教の概念や習慣が自在に使われていた。1週間を7日に分け、賛美歌が歌われた。「はじめに2神、エホバとヌデンゲイ（ママ）がいた。エホバは粘土から人間を作ることでヌデンゲイに挑戦し、勝利をおさめた」とP・ワースレイの『千年王国と未開社会』の一節に紹介されている（ワースレイ[1981], p. 33）。運動は次第に土地の民中心の政治体制の確立を主張しはじめ、海岸部の大首長たちが統治を達成して形成した「現地人政府」と、その後の植民地政府に反対する立場を鮮明に打ち出しはじめた。植民地政府は当初無視していたが、運動が反白人・反植民地政府の一掃を主張するようになると、法で対処すべき問題となり（Kaplan [1990], p. 7）、ナヴォサヴァカンドゥアをロトゥマ島に流し、側近と一村全部（250名）をカンダヴ島に流した。

「プロトゥ」は、幸運な死者がたどり着ける豊穡の楽園である。キャペルの辞書（Capell [1971]）によれば、この語はポリネシア起源の語であり、「プロトゥ・クラ」は「天、天国」、「プロトゥ・ナワナワ」は幸せの「浮島」である。生者でも例外的に「プロトゥ」を垣間見たり、死の危険を冒して訪ね

たという伝説が存在する。ここは女たちだけの住む島、貴重な品物がある理想の国として描かれる。そこを訪ねて赤いココナツや珍しい樹皮布(タバ)を持ち帰った者が、禁忌を犯し、「プロトゥ」の話を村人に語ったために死んだ(Carey [1891], p. 34/Heartley [1922], pp. 10-11)と伝えられている。「外来王」とこの種の理想の島との直接的な関係を示唆する資料はないが、後に登場するこのトゥカ運動の流れを受けたアポロシ・ナワイの言動からは、自らを「首長」と位置づけた様子がうかがえる。ラウ島の伝説では「プロトゥは首長たちの町で、家々は美しかった」(Johnston [1917], pp. 25-33)と述べられている。プロトゥの大首長の息子の好意で島を訪ねることができた男性は、4度神の島の特産物を自分の村に持ち帰ることができた。しかし島に行ったのは彼の魂だけで、身体は渚で洗われていた。男性は、プロトゥに滞在中にいそしぎに残した身体の片目を食べられ、以後「片目」(マタ・ドゥア)と呼ばれた。「プロトゥ」は神の「禁忌」(タムブ)に守られた場所であり、そこを訪れる者は禁忌違反の代償として死か、何らかの犠牲を求められた。その代わり文化英雄として、珍種の椰子の実などの貴重品を手に入れることができた。

海の彼方には、祖先や神々の住む島が想定されている。その海の彼方から到来するものには、フィジー人にとっては人間のものとは異なる、霊的な威力が備えられている。そこに「外来」の「威力」(マナ)の源が求められていたと考えることができる。

第2節 ザコムバウ政府の成立

18世紀の終わりは諸首長割拠の時代であった。有力な首長たちは近隣の村落を征服統合し、献納制度に組み込んで、新たな同盟(マタニトゥ)を組織していた。同盟内の相互の連帯は弱く、裏切りを繰り返していた(Routledge [1985], p. 35)。子供と母方のオジの関係を「ヴァス」といい、姉妹の子供はオジの継承権を主張できる。首長国におけるタイトルの継承権を、ライヴァ

ルの首長国に婚出した姉妹の子供（ヴァス・レヴ）が主張して開戦し、また兄弟・異母兄弟間での継承権の争いも暗殺や戦争に発展し、当時は慢性的な戦争状態にあった。

1. ザコムバウの「覇権」獲得

バウとレワの両マタニトゥは、1843～45年と1854～55年の2期に及ぶ長い戦争を行った。バウからレワへ婚出した高位の女性が逃げ帰った。本来なら送り返すところだが、敢えてとどめてレワを侮辱し、第1次《バウーレワ》戦争を開戦した。ザコムバウの異母兄弟でレワの首長とヴァス関係にある首長が、ザコムバウの暗殺を謀ったが失敗した。逆にバウの通報者にレワの首長（ロコ・トゥイ・レケティ）が1845年に暗殺され、バウ島系の新首長の即位で決着した。以後レワはバウ島への献納者の位置に下った。ザコムバウは母がレワ出身で彼を産んですぐに死亡したため、オバが彼をレワに連れて行って育てた。敗北当時、彼の幼年時代からのライヴァルで、憎悪しあっていたガラニンギオは他地区の問題に関わっておりバウ島の攻撃を逃れることができ、1854年の第2次戦争では主役となって戻ってきた。

バウ島系の首長が1852年に死んだ。長年のバウからの屈辱を晴らすために、ガラニンギオを新首長に選んだ。第2次戦争は、ザコムバウの長年のこのライヴァルが新首長に就任したことで開戦した。ザコムバウに敵対するグループが連盟を組織した。ガラニンギオ、米貿易事務官ウィリアムズ、ザコムバウの従兄弟マラ、トゥイ・レヴカとレヴカの白人貿易商人たちがバウ島を包囲し、船が1艘も近づけぬようにし、食料や武器の補充を遮断した。バウ島内では敵に寝返るものも多く、重要拠点であるバウ島の対岸にあり、レワへの侵入口にもあたるカムバの攻略にことごとく失敗し、レワ側が終始優勢を保った。

《ザコムバウの改宗とその後の「宗教戦争」》（1855年7月）

ザコムバウは以前から白人宣教師からキリスト教に関する話を聞き、覇権

を握ったときに改宗すると約束はしていた (Calvert [1983], p. 299)。周囲を包囲されたなか、トンガ王タウファアハウがシドニーへの旅の途中でバウ島を訪れ、キリスト教への改宗を勧め、1854年にザコムバウは改宗した。この改宗を機会に宣教師が支援を始めた。レワ側はザコムバウに父を殺されたバウ島の首長にタムプア (鯨齒) を贈って暗殺を依頼したが、その首長を宣教師が説得して止めさせた。その前後にレワの首長ガラニンギオが病に倒れたのを機会に兵を引きあげ、翌年死亡した (1855年)。彼は赤痢に何度かかかり、宣教師から薬を貰っていたので、宣教師に毒殺の疑いがかかり、死後直ちに家が焼き払われた。そのとき米通商事務官ウィリアムズの家も焼かれた。これはレワでの出来事だが、後にフィジー全土の責任を負う「フィジー王」を名乗ったザコムバウの政府には、この事件が厄介な賠償問題として米国との間に発生し、圧力を受けることとなった。

問題はそれだけではない。改宗後は、いままで彼を支援してきた「異教」の勢力が離れた。《レワーバウ》戦争の決着に納得しないレワの勢力がバウ島の対岸のカムバには残っており、ザコムバウがフィジーの神々を捨てたことに怒りを覚えた異教の首長たちがザコムバウの従兄弟ラトゥ・マラに合流した。この戦争は「旧体制」における戦争から新たな「宗教戦争」への転換を示す。古い生活様式と新しい生活様式、野蛮と文明、「異教」とキリスト教との争いへと転換した。この「宗教戦争」にはトンガ王も参戦した。彼はトンガから1000人の兵士を従え、ラウ島のマアフと1000人のトンガ兵を加えてバウ島を支援した (Derrick [1974], pp. 112-113)。トンガの参入は従来のフィジー流の戦争の常識を覆した。従来なら勝負が決する前に投降が始まり決着がつくのだが、トンガ兵は防御陣を正面から突破した。トンガ兵は強力な首長のもとで結集しており、まとまりが強く、首長同士が敵対しあうフィジー兵を追い散らした。ラトゥ・マラは、「トンガ兵と戦うのは馬鹿なことだ。彼らは神だ、人間ではない」と語り、逃げだした (同上, pp. 114, 129)。以後しばらくはトンガとバウ島との間には良好な関係が保たれた。

2. 4次に及ぶザコムバウ政府 (1865年, 1867年, 1869年, 1871年)

1860年には、木綿の試験栽培の結果フィジーでも標準に達する品質が得られることが判明した。米国の南北戦争による木綿の価格の高騰でフィジーでの木綿栽培が採算の取れるものになり、植民者の数は1870年には1700人になっていた。白人居留者の人口が増え、彼らの要求によって「現地人政府」の設立が試みられた。また彼らの援助なしでは首長たちは「政府」を運営できない状況になっていた。彼らの地元民との関係の持ち方には2種類みられた。一方では高位の首長の娘を妻にし、ラウ諸島を統治し「ラウ王」(トウィ・ラウ)を名乗ったトンガ人首長マアフの側に住んで貴重なアドバイスを与え、地元民と友好的な関係を築いた者がいた。他方ではオーストラリアでゴールド・ラッシュの夢に破れた後、フィジーに一攫千金の夢を追い、現地人労働者を苛酷に扱い、そのため地元民に栽培地を頻りに襲われた者がいた。

《近代国家としての第一歩》

フィジーでは12の首長国が実権を握っており、1865年に最初の現地人首長国同盟を作る提案がなされ、7人の大首長が署名した。裁判権は全体会議がもち、法は全土に有効であり、税金は各首長が徴収する。ザコムバウが最初の盟主 (president) に選ばれた。第1次の同盟は、「相互不信と嫉妬による争いが何時起きるかも知れぬ不安定な時代が終了し、文明的な政府による原理と方法に首長も臣民も慣れはじめ、法に基づく首長の特権と単なる圧政との相違を知るようになった。首長も責任についての基本的な意味を理解するようになった」(Derrick [1974], p. 159) という「近代国家」としての第一歩をやるしたという意味があった。ザコムバウが2年2期盟主をした後、マアフが後継者になろうとしたとき他の首長からの支持を得られず、同盟自体が崩壊した。トンガ人首長によるフィジーの「征服」に対するパウ側の首長たちの反発と不信には非常に強いものがあつた。

1867年の第2次ザコムバウ政府では、ハワイ王国を参照して書記官のジョンが憲法の枠組みを整えた。60名の白人居留者が討議に加わり、3年間だけの暫定憲法を認め、297名の首長たちも署名した。憲法に基づき5月に「王」の戴冠式が行われた。「王」は最高権力を持ち、軍事の最高司令官で、宣戦布告、議会召集、条約締結、地区の長官の任命などの権利をもつ。白人居留者には公平さと秩序に反しないかぎり特権が認められた。白人の土地の使用を可能にし、労働者の採用も容易にした。1エーカーに対し1シリングの土地使用料の徴収、地元民を労働者として雇ったときに年5ドル(1ポンド)の税金を取るなどが決まり、法律も殺人、放火、反乱、反逆、生命・財産の保護、戦争時の武器の売却に適用されることになった。全フィジー人に投票と土地に対する税金が課せられた。しかし当時レヴカに在駐の英国領事はザコムバウの「王権」を認めず、英国臣民で現地政府へ土地税と投票税を払う者(白人入植者の95%)は英国政府の保護から外れるとの見解を示した。この決定で、財政を白人居留者からの税収入に頼る予定であった第2次ザコムバウ政府は運営困難に陥った。しかし法律はフィジー人に対しては強制力をもっていた。

1869年第3次ザコムバウ政府の設立も白人居留者の必要に応じて試みられた。植民者は木綿栽培での利益と、砂糖栽培の可能性を見込んでいたが、土地所有の安全性を確保するための交渉をしようとしても相手が存在しない。そこで1867年の失敗の原因を反省せぬままに、白人居留者はまた新憲法の草案を作り、彼らの政治的権利を先住民と同等にするために政府を発足させた。しかし英国領事の考えは変わらず、政府は機能せず、また失敗した。

白人居留者は労働力の不足に直面して、ニューヘブリデスなどから島民を誘拐し、プランテーションで働かせようとしたが、その「奴隷船」は英国戦艦に捕らえられた。「政府」は労働力移入に関する委員会の設立、労働時間・食物・住居・賃金についての規則の制定など、自分たちの能力を遙かに越える問題に対処しなければならなくなった。白人と彼らが使用する労働者をもっとコントロールするには英国政府の介入が望まれた。1869年にはザコムバ

ウとマアフの同意を得て、フィジー諸島の保護をどの国に求めるか公開の会議が開かれた。この段階では、併合の申し出は英国政府から拒否されたが、10～20年間の保護を求めようと決議された。

1871年の第4次政府は、政府の運営資金が入ったことが今までと違っていた。レヅカで白人と対立していたロヴォニの民が、人頭税に反対して反乱を起こしていた。政府が白人の後援を得たのをきっかけに、ロヴォニの民の制圧にも白人の手を借りた。降伏したロヴォニの民は伝統に則って土を入れた籠を差だし、土地の権利を征服者に委譲した。しかしながらザコムバウは伝統とは異なり、その土地を白人に貸し、降伏した民を白人植民者に労働者として渡し、そこから1100ポンドの資金を得、政府の設立資金とした (Derrick [1974], p. 201)。この第4次の政府の成否はザコムバウのライバルであるマアフが参加するかどうかにかかっていた。マアフの本心は不明だが、6月にザコムバウを訪れ、ラウ諸島以外の土地の権利をすべて諦め、ザコムバウを「フィジー王」として認めた。マアフには後に述べるように「外来の征服王」としての真の実力があり、英国領事の妨害がなければさらに領土を広げる可能性があった。ザコムバウ政府としては、不気味な存在であるマアフをラウ地区の知事に任命し、徴税権や兵力に関する絶対的な権利を保証した。彼は年間800ポンドの税収とラウ総督として1000ポンドという法外な金額を受け取るようになった (同上, p. 204)。

第3節 「外来王」の拒否と受容

植民地時代を迎える前に、「外来王」の選択がみられた。その状況は今日までも継続しているといえる。南太平洋に一大勢力を築こうとしたトンガ人首長マアフの野望を拒絶し、フィジー人は大英帝国の勢力下に入ることを選択した。以下、拒否された「外来王」と受容された「外来王」の違いを検討しよう。

1. トンガ人首長マアフ

象徴的に「外来王」を殺害し、土地の神として再生させるのが「即位式」であり、先住の土地の民が後来の首長を「王」として即位させることを先に指摘した。さてトンガ人貴族でラウ、マズアタ、ザカウンロヴェを支配下に収め、自ら「ラウ王」(トゥイ・ラウ)を名乗った大首長マアフの場合はどうであろうか。後に見るように、キリスト教とトンガ人教師を戦略として用い、小首長国の内政に干渉し、勝者と敗者を共に支配下に置いて征服していく彼の外交手腕は卓越していた。「外来王」とは、土地の民とその文化を取り込んで、新たな統治を達成する者である。白人入植者を含んだ新たな状況を迎えて、従来の「土地の所有概念」は通用しなくなった。また「政府」の運用資金の必要性も生じた。それらの課題を克服したのが異郷の地トンガから来たゆえに、新たな視点をもつことが可能であった「外来王」マアフであった。英国領事や他の西洋諸国からの妨害がなければ、ニュー・ヘブリデスからトンガにわたる一大帝国を建設するという彼の野望 (Routledge [1985], p. 11) も達成が可能だったろうと思われる。彼はまさに歴史に残る南太平洋の「外来王」であった。

マアフは1848年、22歳のときフィジーに来た。ヴァヌア・バラヴ島ロマロマとヤロとの争いに口を出し、弱い方に味方し、弱者と敗者を自らの支配下に入れ、両者をコントロールした。その後キリスト教トンガ人教師を守護するという名目で、モアラ諸島を勢力下においた。白人といち早く良好な関係を結び、1857年に元英国領事であったスワンストンを書記官として採用した。カムバの戦いの後ベンガ島を征服し、1862年にパウ島への対抗勢力を結集しようと計画したが、英国領事に阻まれた。1867年にはタヴェウニを治めるトゥイ・ザカウとヴァヌア・レヴ東部を治めるトゥイ・ブア(母がトンガ人)を説得して「北東同盟」を発足させ、税を徴収し、裁判所を設け、憲法も批准させた。3首長が首長会議を構成し、中から年俸1000ドルの最高指揮官を

選出する。その指揮官にはマアフが就いた。しかし数カ月後には、マアフの野望を恐れた宣教師がラケムバ島のトゥイ・ナヤウに同盟への参加を拒ませ、同盟は機能しなくなった(同上, pp. 112-113)。1868年トンガ王タウファアハウは、王位継承権をもつマアフにトンガでの権利を諦めさせる代わりに、フィジーにおいて自分が所有する土地の権利を正式に譲り、フィジーでのマアフの地位を確立させた。1869年マアフは「北東同盟」を「フィジー同盟」に発展させ、自らその最高司令官に就いた。そしてラケムバとヴァヌア・バラヴを結合し「ラウ王国」を創立した。トゥイ・ナヤウは降参し、下位のパートナーとして海産物を献納する立場に下り、マアフは「ラウ王」(トゥイ・ラウ)という新称号を名乗った。1870年トゥイ・ザカウのために「トゥイ・ヴァヌアレヴ」という新称号を設けて懐柔し、自らの称号「トゥイ・ラウ」を認めさせた。

法はトゥイ・ラウが議長を務める首長会議で制定され⁽⁵⁾、白人居留者も会議に代表を送った。土地制度はオーストラリアの土地制度を採用したトンガの政策に倣った。土地はすべて「政府」の土地であり、500エーカーを超えない範囲で、首長が貸し付ける権限をもつ。このマアフの土地政策は白人居留者からは歓迎され、彼らを政府の中に取り込むマアフの意図を成功させた。彼は従来の土地所有システムを変え、男性納税者1人1人に社会的地位と重要度に応じて土地を割り振った。税金を納めないものには土地を与えないため、税収入を確保する有効なシステムとなった。この土地制度のうえに経営されたマアフの政府は安定し、白人居留者たちは安全を保証され、満足した(Derrick [1974], p. 188N)。しかしマアフの死後はこのシステムを運用できるほどの後継者は出現しなかった。

マアフの野望は、故国を離れ「外来王」としてフィジー東部を征服していく過程で育まれたと考えられる。土地制度、法の適用、白人との協力といった思い切った新制度の採用は、旧来の地元の文脈に絡め取られていたフィジー人首長には思いも及ばない画期的な政策であった。また彼の征服が、ラウ諸島という、レヴカの英国領事の権限が遠く及ばず、かつトンガからの支

援を受けられるという周縁的な地域で進められたことも、彼に帝国への野望を抱かせた要因であった。しかし英国と事を構えた途端、彼の野望は終焉した。

《拒否されたトンガ人「外来王」マアフ》

マアフのフィジー全体の同盟盟主になる試みは何度か失敗した。まず1865年の首長国同盟の結成後3年目にマアフが盟主に就こうとすると強烈な反対に出会い、マアフを選出するよりも首長国同盟それ自体の崩壊が選択された。フィジー全体の「外来王」としての即位は地元の首長たちによって阻まれた。しかし実質的にはマアフ抜きでフィジーの政治は成立せず、その後もマアフを含んだ話し合いがもたれた。1874年の英国への委譲の動きのなかでも、マアフが反対するなら賛成するというトンガ人憎しの感情は継続していた。そしてマアフが賛成していると聞くと、急遽反対派に回った。しかし委譲せずにはフィジーの現状は打開できず、ついに英国の植民地体制下に入ることになった。マアフは一地域の首長として年金を貰う存在になった。

ラウ地域を中心とした「北東同盟」の盟主「ラウ王」(トゥイ・ラウ)の段階までは「外来王」として受け入れられた。しかしさらにフィジー全体の覇権を狙ったときには、ライヴァルである「フィジー王」(トゥイ・ヴィティ)と英国領事に阻まれ、彼は1代の「ラウ王」(トゥイ・ラウ)で終わることになった。マアフの死(1881年)後、「トゥイ・ラウ」という新しい称号を継ぐものはいず、マアフが確定したトンガ人の土地所有権もあらゆる場所でクレイムをつけられ、危うくなっていった⁽⁶⁾。

2. 受容された「外来王」：英国女王

何よりも英国による植民地政府が望まれた。そのとき誰が何故英国への併合を望んだかを明確にしなければならない。南太平洋の植民地前史では、白人植民者や貿易商人たちが自らの権利と安全確保のために植民地政府の必要

性を強く感じ取っていた。以前のままなら現地の首長たちは領域内の自分の臣民をそれなりに統治しえており、新たな憲法も政府も必要なかった。問題は白人入植者であった。

《海外からの干渉》

フィジーの白檀を白人が発見したのは1800年代の初めであったが、1830年までにはほとんど取り尽くされ、以後はナマコの貿易が始まった。白檀もナマコも中国との三角貿易用に採集された。その後、木綿栽培の可能性が英国人大佐によって探られた。木綿栽培には土地所有と労働力が、そのほかに政府設立費用の捻出などが問題として掲げられた(Routledge [1985], p. 96)。英国領事プリチャードがフィジーに来たのは1858年9月10日であった。彼はフィジーでの木綿栽培の広告を出し、1860年には英国人技師が試験栽培を行い、標準に達する品質のものを得た。運搬費用が高く採算が取れなかったが、1861年からの米国の南北戦争中は世界の木綿価格が高騰し、採算の取れるものになり、白人の数は1700人程度になった(同上, p. 108)。

英国領事プリチャードはフィジーの英国への委譲を計画していた。英国軍艦エルク号が寄港しているのを機会に、ザコムバウの至上権に疑いをもったプリチャードは、どの首長を中心に据えて交渉するかを明らかにしないまま1859年12月に各地区の首長をレヴカに集めて、英国への委譲のための条件を整える仕事に取り掛かった。マアフに関しては、彼のフィジーにおける権力と征服した土地をすべて否定し、ただトンガ人居留者と訪問者に対してのみマアフの権力を認めた(Derrick [1974], p. 143)。彼は1863年に自らの商売に力を入れすぎて、当局の査察を受けた。自己の利益を極端に追求した疑いで解雇された(Wood [1978], p. 172)。

先の1855年のカムバの戦いでレワの兵士が宣教師の家を焼き払った後、川を越えて米貿易事務官ウィリアムズの家も焼き払ったことはすでに述べたが、米国からは1200ドルと家の再建、元の場所への居住が求められた。またザコムバウには調停裁判の手続きが皆目理解できないまま、1855年には3万ドルに、

そして1858年にはウィリアムズへの賠償金の総額が4万3531ドルになった(Derrick [1974], pp. 134-135)。しかし1869年に米国から実情を検分する者が派遣され、その額は3分の1が適当だと報告された(Wood [1978], p. 173)。

現地人と友好的な関係を築いていた白人は、首長たちから土地を提供してもらってはいたが、その土地に関して「所有権」を獲得したのか「使用权」を獲得したのか明確ではなく、ヨーロッパ社会で通用しうる「契約」に依拠した保証を得たいと希望した。またゴールド・ラッシュ以後、ヴィティ・レヴ島西部などに入植した白人の多くは、現地人労働者を酷使し、山地民とも絶えず戦闘を繰り返した。白人入植者は皆、資格をもったしかるべき交渉相手(=政府)を必要と感じていた。

首長たちにとっては、すでに白人がフィジーに存在することは自明の前提になっており、白人の補助なしでは政府を維持することができなくなっていた。白人の帰国を訴える動きは、周辺部で起こった山地民のトゥカ運動、後の西部におけるアポシ・ナワイの「ヴィティ・カンパニー」運動の形で現れた。白人宣教師はキリスト教徒たるフィジー人には必要不可欠な存在であり、宗教を異にする者にとってのみ「白人の排除」が概念化したのであった。地域内の白人を現地の首長が治めるために、新たな政治体制が模索されていたのである。それを反映したのがマアフ政府やザコムバウ政府における憲法制定であり、法と議会による統治の試みであった。しかし現地のこのような事情を理解せぬ英国領事は、新たな政府の試みをことごとく失敗させた。白人居留者が自らの存在を安定させるために「混血」の現地政府を発足させながら、英国領事の拒否にあつて税金を納められず、白人からの税収入なしでは政府の経営が成り立たず破綻するという経過を再三繰り返した。

《国譲りの伝統(=即位式)：委譲文書への署名式典》

今回の新たな「外来王」を迎えるためには、何よりも予め内政・統治能力が整備されることが条件として掲げられた。白人居留者は、政府の成立を望む者と「政府」への税金納入を拒否し反抗する者とに二分された。現地混血

政府は失敗を繰り返しながら、山地民と白人居留者を統治する能力を獲得していった。1871年に発足した第4次ザコムバウ政府は、英国戦艦の兵力の応援を得て、レヴカでの白人入植者の武器を持った抗議行動を鎮圧した (Derrick [1974], pp. 214-215)。またバー地区では白人入植者を山地民が殺害したのを機会に、政府軍に対する白人入植者の反乱があった (同上, p. 227)。政府はそれも鎮め、さらに1874年5月にはキリスト教徒の村を襲った山地民を平伏させた (同上, pp. 244-245)。英国政府は「併合の申し出は首長とフィジー人民が行うもので、英国政府が行うものではなく、また現地政府の負債を英国政府が引き受けることはなく、土着民の権利と首長の地位と特権が保持されるように併合が進むことを望む」(同上, p. 239) との見解を示した。

フィジー王は「フィジーの法」であった戦闘用の棍棒を英国女王に譲渡し、「棍棒による法」を放棄し、文明社会の形態と原理を採用することを表明した。海の権利、大地の実り、人民への権利などすべての権利を英国女王に委譲した。これはまさに「外来の王」を土地の神として迎える「伝統的」な儀礼であった。それ以来英国女王の代理である総督による植民地政府の体制と、ザコムバウを頂点とする「伝統的」政治体制の二重政体による間接統治が続くことになる。概念的には《土地の民による「外来の王」の即位式》という形態がここにみられるわけであるが、世界的な視点からは大英帝国の世界戦略の一環として小さな領土が併合されただけである。

独立後も英国連邦に留まっていた1982年にはエリザベス女王をバウ島に迎え、歓迎儀礼が執行された。土地の首長によってヤングナが準備され、儀式どおりに女王が飲んだ。単なる歓迎儀礼としてのセレモニーではあるが、現地の論理としては、女王が「土地の神」として再生し、実り多き土地としてフィジーを祝福することを意味する。現代世界のシステムのなかで、女王の訪問がフィジー流に読み変えられている状況は、委譲文書に署名した時代も、現代の訪問でも共通している。

第4節 「外来王」の変遷

時代を経るにしたがって、「外来王」の内容は変化する。植民地体制下ではフィジー人が直接表に立つことはなかった。この時代に問題となる「外来者」は、インドからの契約労働者である。植民地政府の政策によって1879年から1916年までに6万人余りのインド人がフィジーに移民してきた。以来フィジーは、現地人であるフィジー人、統治者たる英国人、そして移民であるインド人、その他太平洋地域からの移民が住む多民族社会となった。先にも述べたように前植民地時代には、現地人との混血政府に反抗する白人と、白人を襲撃する山地民の両者を制圧する領域内の統治能力が、英国の植民地になるためにあらかじめ求められた。英国への併合を打診されたとき、英国は経済的・軍事的に負担になるような植民地を望まず、統治力が備わった段階でフィジーの植民地化を考慮にいとると、条件付きの回答をしていた。植民地時代も後半になると、多民族社会における、または世界状況のなかにおけるフィジー人の世界認識と、世界の他民族がフィジーを如何に認識しているかが問題となった。

1. 海外からのマナ (=教育・戦功) : ラトゥ・スクナ

フィジー人の目を世界に向けるのに、ラトゥ・スクナと彼の同時代人であるアポロシ・ナワイが特に大きな役割を果たした。2人は共に教育の重要性を認識していた。アポロシは教育を受けられぬまま生涯を閉じるようになったが、教育があったらフィジー人を「個人主義と、商業精神をもった人民にし、インド人やヨーロッパ人と対抗できるように」導けたのに、と残念がった (Scarr [1980], pp. 14-15)。また両者は、ヨーロッパ人が「フィジーの土地を利用して、インド人の労働力を使い、ヨーロッパの資本が利益を得ている」という見解でも一致していた。しかしアポロシとは異なり英国オックス

フォード大学で教育を受けたラトゥ・スクナは、「個人主義」「自由」は「核家族」が存在しないフィジー社会には不適切な概念だと考えていた（同上，p. 21）。ラトゥ・スクナの父親で、先の宗教戦争で敗北し殺されたラトゥ・マラの子であったラトゥ・マンライウィウィは、フィジー人に対する法的規制を廃棄させるためには法律の知識を手に入れる必要があると認識していた。マタンガリ単位でしか所有が認められず、土地委託局に登録されて売買が禁止されている土地制度は、フィジー人の「発展」にとって障害になっていると感じていた。法的にそれらに対処するためには、英国での教育を受けることが不可欠だと考えていた。彼は息子が警察裁判所判事か、地区の行政長官になってフィジー人の問題を扱えるようになることを望んでいた（同上，p. 25）。

植民地政府はラトゥ・スクナにオックスフォード大学への留学のために4年間休暇を取ることを認めた。しかし父はすでに弟をメルボルンに、妹をシドニーに留学させており、ラトゥ・スクナの留学資金がなかった。そのときラー地区長官ラトゥ・シミオネが、フィジーの代表として若い首長に英国で教育を受けさせるために動いた。タイレヴで地区学校設立の企画があり1039ポンドを積み立てていたが、植民地政府はその計画を拒否した。ラトゥ・シミオネは提供者を説得してその資金をラトゥ・スクナの英国行きの資金にすることを納得させ、行政府もそれを認めた。彼はこのような資金提供に対して残りの人生すべてをかけて返済すると誓った（同上，pp. 26-27）。海外留学（1914年）とフランスの外人部隊に入っの第一次世界大戦への参戦（1915年）が彼を英雄にし、フィジーのヨーロッパ人社会での有名人にした。そしてフィジー軍を労働隊としてフランスに派遣したとき（1917～19年）には、その指導者の一員となった。

彼は第一次大戦後に再び留学し、残りの学業を修了した（同上，p. 59）が、そのときの資金は彼の母方の「トゥイ・ラウ」の血筋をたどって調達された。ラトゥ・スクナは父がバウ島の大首長ラトゥ・マラの子で、母も「トゥイ・ラウ」の系統に連なる「聖なる血」を引く高位の首長であった。1919年6月から7月にかけて彼はラケムバを訪問し、自分の地位に備わった権利として

留学資金を受け取った。このとき行われた歓迎儀礼のために教会儀礼がおろそかになると牧師たちは渋い顔をした。教会と首長の何世代にも及ぶ緊張関係が表面化し、かつ資金調達にかり出された平民と首長との緊張も顕在化した。ラトゥ・スクナの更なる教育のために彼の臣民は多くの負担を被った。彼は贈られた大量のヤムと他の食料を船に詰め込み、バウ島を訪ねた。バウ島ではその食料のおかげで1200ポンドの現金を受け取ることができた。そうして1919年10月に英国に出発し、1921年10月に帰国した。

第二次世界大戦では、日本軍をくい止めるため、ラトゥ・スクナが、「フィジー人は大英帝国のために血を流してはじめて認められるのだ」(同上, p. 130) と人々に呼び掛けると、それに応じて5000人以上が軍服を着た。ソロモンでのフィジー軍の活躍が認められ、以後フィジー人の自治の範囲が広げられ、1946年にはラトゥ・スクナが「フィジー人担当省」の長官になった。

ラトゥ・スクナというフィジーの高位の首長が、海外での教育と参戦体験を身につけて帰国し、英国植民地政府からの承認を取り付けながら、ついにはフィジー人を統治する「フィジー人担当省」の長官になった。これは、内の「王」が、「外」でマナ(霊力)をつけ、フィジーに戻って英国政府の承認を受けて、フィジーの「王」になったと言い換えることができる。もはやトンガ人首長マアフや英国女王のような征服的な「外来王」は、世界情勢のなかで成立しなくなった。外来の力が、現地を統治する時代ではなくなるとともに、内部のしかるべき人物が、海外の、それも正規の英国の「力」(マナ)を身につけ人民を指導する時代になった⁽⁷⁾。

2. 自己信頼の獲得と新たな対立

戦争への参戦、血を誰のために流すか、という問題がフィジーで「国家」を語るうえで重要な問題となってくる。英国への併合の条件にフィジー領域内の統治能力が問題となり、白人植民者の武力蜂起を抑え、山地民の攻撃を撃退し平伏させ、「国家」としての統治能力を証明した。植民地時代には、第

一次世界大戦で負傷し帰還したラトゥ・スクナが、フィジー人を国際的に認めさせるために百名の労働隊を派遣した。また第二次世界大戦では何千人もの兵士をソロモンに送り、死傷者を出しながら成功裡に帰還し、国際的な評価を獲得した。これがフィジー人に「一人前」の国民としての自信をもたせ、フィジー人によるフィジー人の政府のための一步を踏み出すきっかけになった。

それに対し、インド系住民は英国のためにもフィジーのためにも血を流すつもりはなく、大戦の最中にストライキを起こし、そのうえ白人兵士と平等の賃金を要求し、受け入れられないと軍隊を離れて村に帰った。インド系住民と同じく、白人と平等の扱いを受けていなかったフィジー系住民からは完全に相入れることのない民族と判断された。フィジー系兵士は、白人兵士と肩を並べて働き、戦うなかで「ボスとしての白人」像を自分たちと同じ人間としての白人像に変えていった。

海外からの「mana」を獲得した者が、首長階級の出身でなくても、行政の主要な役職に就くという流れが、第二次世界大戦の退役軍人を起点にして始まった。彼らのリハビリテーション・プログラムに海外留学が盛り込まれ、帰国後彼らは主要な役職に就いた (Ravuvu [1988], p. 55)。

第5節 政党政治への動き

1970年の英国からの独立を前にして、フィジー系住民は自分たちの人口を上回るインド系住民と政治的に直面することになった。ラトゥ・スクナの死後フィジー系住民を代表して政党政治を舞台に活躍したのがラトゥ・カミセセ・マラ (現共和国大統領) であった。「外来」の者が「王」として迎えられる時代は終わり、フィジー内部の異民族との同盟に成功した者がフィジーを指導しえる時代になった。そのためには、フィジーの首長が海外の教育を受け、「mana」を獲得して再び「到来」することが求められた。

1. 同盟すべき「外来者」とライヴァル

ラトゥ・スクナの後を受けた初代首相ラトゥ・マラもやはり英国で教育を受けており、英国および世界がフィジーに何を要請しているかを十分に理解していた。彼は多民族よりなる同盟党を1966年3月に結成し、海外から非難を受けぬ政府を発足させた。それが独立に際してのフィジー人を導く「王」として必要とされた資質であった。

1960年代は、長い植民地体制下でまどろんでいたフィジー人用の国内制度が、1970年の完全な独立に向かって変換する時代であった。住民の選挙による政治参加と政党政治が導入された。フィジーの政党には、世界的なナショナリズムの動きも反植民主義も大きな影響を及ぼすことはなかった。96年前の委譲の日と同じ10月10日を独立の日にした。これは他の第三世界の国と大いに異なるところであり、「脱植民地化」は英国によって仕掛けられた。

ラトゥ・マラが特に注意したことは、世界からの孤立化と、批判を受けないことであった。同盟党 (Alliance Party) の発足に際し、「我々自身を統治するために結集した。世界にすべての民族が同意した良き政府の模範を示すのだ」(Alley [1986], p. 30) と彼が宣言したように、フィジー人協会 (フィジー系)、フィジー国民会議、フィジー・マイノリティ党、全フィジー・モスリム政治団体、無所属 (以上インド系)、ロトゥマ会議、ロトゥマ協会 (以上ロトゥマ島人系)、トンガ人協会、中国人協会、一般有権者協会 (白人系) の組織が集まって同盟党は結成された。フィジー人協会 (Fijian Association) は、フィジー人コミュニティの全国的な組織であり、母体はラトゥ・スクナと法律家スコットが作り上げた。フィジー人の土地所有システムと憲法改正に際しては、フィジー人の協議を最優先することなどを主張した。ラトゥ・スクナの死後は協会のリーダーシップをとる者がいず、機能していなかった。同盟党としては、特に現行の土地制度の維持、インド系とフィジー系住民の公共事業における民族的なバランス、フィジー人担当省と首長会議⁽⁸⁾が享受してい

る権力の保持、将来の首相がフィジー系住民であること、立法機関でフィジー系が絶対的多数を占めることを提案した。

インド系住民は、1965年西部の中心地ラウトカで連邦党 (Federation Party) を結成した。そこでは経済的な不安定性、政治的権利の欠如、統治権力と商業的利益の結託、社会的ステイタスと国家的アイデンティティの欠如などが問題となっていた。これまでインド系住民は移民契約労働の政策内で扱われてきた。彼らは契約労働状況下での辛い経験を共有はしていても、政治的に組織された党のもとに統一されたのは初めてで、連帯感が醸成されるまでには至っていなかった。党首パテルが特に注意した点は、将来連邦党が政権をとり、インド系住民がフィジーを支配しようとすることは無意味で危険であるということであった。また彼が反西欧の立場をとると語られているのは「悪意のある噂」であると否定し、西洋からの投資を必要としていると表明した。スローガンとして、民族的区分による法律のあり方の廃止、学校・道路・病院・診療所の建設、二重政府の廃止、全民族の経済的社会的な改良を掲げた。1966年の選挙では、同盟党が22議席のうち13議席、連邦党が9議席を獲得した。ラトゥ・マラが首相になり、内閣を組織したが、連邦党は議会をボイコットした。

1969年にパテルが死去した後、「連邦党」は「国民連邦党」と名を変えた。党首コヤは同盟党との和解の必要性を認識した。現地行政を進展させるための両党間の協力と、南太平洋諸国の一員として長期にわたる責任と可能な役割についての話し合いが行われた。

2. 独立後のフィジー：インド系「外来王」 (=首相) の拒否

植民地時代以前にトンガ人首長マアフが、フィジーの全国的な首長国同盟の盟主になろうとしたときに拒否されたことがあった。独立後7年目に行われた選挙の結果インド系住民の代表がフィジー首相に就こうとしたときには、武力を伴うものではなかったが、総督の意図的な裁定で組閣が阻止された。

「外来王」たる英国植民地政府のもとで対外的な事柄から免除されてきたフィジー人は、英国との保護的連携を維持し、完全な独立をもっと後に迎えようと考えていた。それに対し連邦党は全権をもった国家としての即時の独立を主張していた(Lal [1986], p. 74)。独立前の憲法整備は、植民地政府と同じ原理が基盤とされ、憲法の革新的な改変はなかった。ラトゥ・スクナのフィジーにおける「バランス」重視策が継承され、フィジー系とインド系、それにヨーロッパ系の住民の間の「バランス」が強調された。しかしそれはフィジー系住民が土地を提供し、インド系住民が安価な労働力を提供し、ヨーロッパ系住民が技術力と資本を投下するという「バランス」であった。インド系住民は、この状態は平等な権利に基づくものではないと批判した。独立後もフィジー系住民の利益の至上権と、ヨーロッパ系住民の特権が認められ、インド系住民が常に平等を求めるという状況に変化はなかった。

1977年の選挙では国民連邦党が、フィジー系の同盟党とナショナリスト党の分裂に乗じて、52議席中26議席を確保して第一党になり政権を担当することになった。しかしリーダーシップについての内部調整がうまくいかず、4日間手探りの状態で組閣が始まらなかった。その際に総督ラトゥ・ジョージ・ザコムバウが積極的な裁定に乗り出し、ラトゥ・マラに暫定内閣を組織するように命じた。国民連邦党党首コヤは、総督と同盟党がインド系首相を阻んだと非難したが、その後国民連邦党は二つのグループに分裂し、力を弱めた。

第6節 平民指導者の台頭

1987年の政変を機会にして、フィジー人の指導者の層が一変した。もはや首長階級の中からではなく、教育や戦功を積んだ平民出身のリーダーが台頭するようになった。教育や戦功による「Mana」を平民が獲得する機会を得、現代の多民族社会で大いに活躍するようになった。政治の場面でもそれが顕

著にみられるようになった。

1. 平民出身の首相：バヴァンラとラムブカ

戦争からの帰還兵で、かつリハビリテーション・プログラムの一環としての海外への留学経験をもつという二重の意味での海外の「マナ」の獲得者が、帰国後首長階級ではなくても役所などの重要なポストに就き、指導的な立場に立つことが多くなった。そして南太平洋大学がスヴァ市に設立されて以来、3年以上の勤務経験のある者から選抜して大学教育を受けさせる奨学生制度によって、大学卒業者も多くなった。海外の「マナ」(=学位)がフィジー領域内で獲得できる「マナ」になり、より身近なものになっていった。それを背景にして、都市のフィジー人労働者の意識が変化し、既成の同盟党の首長制度、キリスト教、伝統の保持という枠組みには収まらない勢力が台頭した。

《再びインド系「外来王」の拒否：民族的対立の顕在化》

独立以後フィジーが掲げてきた「民主主義」のあり方に大きな変化がみられたのが1987年の選挙であった。都市労働者が支持した《労働党》の掲げる新たな「民主主義」勢力が、インド系住民勢力を背景にし、平民出身のバヴァンラ医師を労働党/国民連邦党連合の党首にして選挙に勝ち、彼を首相に就けた。そのインド系住民の支持のうえに成り立つ連合政府に危機感をもったフィジー系住民は、その政府をインド系住民の「傀儡政権」と決めつけ、フィジー人ではあるが西部出身のインド系「外来王」(=バヴァンラ首相)を拒否した。この政権は旧首長体制から労働党体制への移行を徴づけるものとして知識人からの支持を受けたが、民族主義者はインド系住民による政権奪取であり、フィジー民族の危機として受け取った。民族主義の立場からは英国の影響下での今までの「民主主義」の廃棄と、フィジー人の「至上権」を確保するための新たな指導者が求められた。それがクーデターによってバヴァンラの労働党/国民連邦党連合政府を崩壊した平民出身の軍人、現首相

ラムブカであった。1987年の選挙以来平民出身の「首相」の時代が到来した。

バヴァンラはフィジーの医科大学で教育を受け、15年間医療を実践した後、ニュージーランドに留学している。その後一貫して医療団体の役員を務め、1985年に新たに設立された労働党の党首になった (Bain & Baba [1990], pp. xvii-xvi)。ラムブカも同じく平民出身である。軍隊の中において、「多民族社会フィジー」について考え、「国家の社会的経済的發展に対する軍隊の役割」に確信をもった (*Islands Business* [Sep. 1987], pp. 4-9)。クーデターを起こしたときは、自分の出身地の大首長トゥイ・ザカウであり総督でもあったラトゥ・ガニラウに政府の運営を直ちに任せた。総督は前首相ラトゥ・マラに暫定政府を組閣させた。新憲法のもとで1992年に行われた選挙の結果を受けて、ラムブカは反対勢力であるインド系議員の支持を取り付けて、ラトゥ・マラの後継者であった、やはり平民出身のカミカミザを抑えて首相の指名を勝ち取った。

バヴァンラは西部地域の平民出身であり、かつインド系住民の支持を受けていたため、全フィジー系住民のリーダーたる「首相」として認められることはなかった。またラムブカは、軍隊を背景としても、ラトゥ・スグナやラトゥ・マラのような高位の出身ではないために、政権を自ら担当するつもりはなく、直ちに総督ガニラウに委ね、自らは一閣僚として背後に退いた。そしてラトゥ・マラ首相に委ねられた暫定政府の期間中に政治的な実力をつけていった。この一連の平民出身の「首相」は、フィジー系住民からの全面的な支持は受けられず、インド系住民からの支持を取りつけてはじめて「政府」を発足させることができた。フィジー人の意識は、都市を中心に変化してきてはいるが、全体としてはまだ「外来のmana」や「軍隊のmana」を獲得しただけの平民に、「王」としての資格を認めていない状況が明確になった。また「外来」でも、「西欧」以外の「外来」が認められない様子を、トンガ人「外来王」マアフの拒否、インド系「外来王」首相の拒否が物語っている。

2. 「外来者」の「内在化」

「王」が連れてきた「外来者」は、「王」と同じ位置に就けるわけではない。伝説のなかでは「征服王」とともに戦士と大工のマタンガリが住み着き、以後土地の民の3マタンガリとともに一つの村落を形成するようになったといわれる。戦士と大工のマタンガリは、その後来性ゆえに所有する土地が先住の土地の民の4分の1程度になっているが、村人としての権利に差はない。それに対して英国植民地政府の政策のもとで契約労働者としてフィジーに運ばれたインド人の子孫であるインド系フィジー人の処遇が、現在のフィジー政府が抱える大きな民族問題となっている。クーデターが示したように、インド系住民が政権奪取を目指さないかぎり、そして第2クラスの市民に甘んじているかぎり、身体的には安全が保証される (Lal [1986], p. 79)。

フィジーにおいては「戦争」が「外来者」についての概念を転換させる要因となっている。戦争を契機に、「ヨーロッパ人」が「ボス」から単なる「外国人」に変わった。そしてインド人に対する認識は、ヨーロッパ人の連れてきた単なる《移民労働者》から、第二次世界大戦に対する取り組みの違いによって、自分たちに《対立するインド系住民》に変化した。1992年の憲法改正でフィジー系議員を37議席、インド系を27議席、その他を6議席とし、フィジー系住民の安定多数を確保した。しかしながら「フィジー人党」(Soqosoqo ni Vakautulewa ni Taukei: 旧同盟党系)から2人の首相候補を出して票が割れた。全70票のうち、まずカミカミザが30票、ラムブカが27票の支持をそれぞれ取り付けた。労働党のインド系議員が最後の決定権をもつことになった。労働党は、クーデターによって彼らの政府を崩壊した張本人であるラムブカを首相に任命した。彼らは、反労働者の立場をはっきりさせた右翼的なカミカミザではなく、憲法の見直しなどの条件をラムブカに呑ませて彼の支持を表明した (橋本 [1993], pp. 17-18)。このように「外来者」(=インド系住民)が「国家」としてのフィジーの中に不可欠な要素として「内在化」し、

フィジー系住民はもはや一族内でフィジー全体の問題を処理しえる時代が終わったことを認識せざるをえなくなった。

まとめ

本章では、「外来王」と考えられる人物が、「外」(=海)からもたらした、または「外」で獲得した「Mana」(=霊的な力)と、そのフィジー国内での働きについて考察した。「外来」の概念は、フィジーが世界的な状況に関わり、それに呑み込まれていく度合いに応じて広がり、そして転換してきた。フィジー人が自らの首長を「異人」(カイ・タニ)と言うときには、樹皮布(タバ)の装着が高位の首長を示すという文化的なコードを相互に読み取れる範囲内で、「外来」の首長を「土地の神」として迎えたことに注目すべきである。「首長」は土地の民から即位式を受けてはじめて「神」として土地の豊穡性を賦与しえる存在となったのである。「外来者」でも、言語や文化的コードを共有しない場合は、そう簡単に「王」になれたわけではなかった。

白人居留者は、19世紀中頃からフィジーのそれぞれの地域に滞在し、土地の「使用权」かまたは「所有権」を各地域の首長から認められた。この「外来」の「異人」は、圧倒的な武力と文明とを背景にもつ存在として迎えられた。現地の人々はキリスト教を信仰すれば、キリスト教の神が自分たちにも文明を授けてくれるものと理解した。しかし白人居留者は現地人の「文明化」よりも、自分たちの世界で通用する「正規」の「法的」な契約に基づいて土地に関する保証を確保することに関心があった。そのために国際的に通用する「現地政府」の創設に苦慮した。

現地人首長には「統治」の概念の明確な変更が求められた。「棍棒による法」から「文書化された法」へ、フィジー人以外の白人をも含めた統治、会議の議決による政策決定などへの移行には戸惑いも多かった。フィジー人と白人居留者のそれぞれの状況に対する当初の英国領事の無関心と無知に阻害

されながら、4次にわたってザコムバウ「政府」は白人顧問から「外来」の知識の提供を受けて、憲法を作成し、法律、税制、警察・軍事などの制度を整えた。もともと首長自身を法としていた現地民には、首長が採用した法の適用を受け入れるのに問題はなかった。しかし白人居留者のなかには、現地人「王」への税金の納入に抵抗する者もいた。現地政府には現地人より白人の統治が何よりの問題であった。「混血」の現地政府が曲がりなりにも「統治」が可能になったのは、その政府を必要としていた白人居留者および英国軍隊の士官の力添えのおかげであった。英国や米国を相手にしはじめた「現地政府」には、従来の首長国での統治概念は通用せず、たとえ植民地として併合される以前でもすでに国内治安・統治の確立が求められた。「フィジー王」ザコムバウの政府には、ヴィティ・レヴ西部と山地が「統治力」の及ばない地域として残っていた。山地がフィジーの領域であるなら、そこで生じた山地民による白人の殺害には政府として責任があり、制圧軍の派遣にも賠償にも応じなければならない。それらの問題が一応解決されて1874年にフィジーの英国への委譲が達成された。混血の「現地政府」が、山地民および白人を制圧・統治し、「近代的な国家」の体制を整えて「外来王」(=英国女王)を迎えた点は特筆すべき事柄である。

植民地時代はフィジー全体を治める英国植民地政府(=外来王)と、伝統的な首長(=内在化した外来王)制度との二重統治制度が採用された。政府の地区長官(プリ)が平民出身の場合に、その地区の伝統的な首長(トゥイ)との間に必ず争いが起こった。この場合地区レヴェルでは地区長官は政府という「外」世界から派遣された「王」のはずではあったが、伝統的首長は自分の権限を素直に委譲すべき相手とは見なさなかった。この状況は今日もみられる⁽⁹⁾。この時代は、フィジー人が植民地体制内で保護されながら、国際社会で認められる「力」をつける期間であった。海外の「マナ」を体得した首長ラトゥ・スクナと彼の同時代人アポシ・ナワイは、異なる立場から西欧人とインド人に対抗しうるフィジー人の育成に苦慮したが、フィジー人の自覚を画期的に促したものは第二次世界大戦への参戦による自信であった。

以後「外来王」の多様化現象がみられるようになった。ラトゥ・スクナをはじめとして海外での教育を受けたり大戦での戦功を積んだ者が、帰還後一種の「マナ」保有者として受け入れられた背景には、「外来王」受容のヴァージョンが存在することを指摘しえる。高位の首長の血を引くものであればそのまま、平民出身者であれば時間をかけた後に、フィジー人を導くしかるべき立場(=王)に就く。その反面、従来白人であればボスの地位に就けたが、尊敬すべき白人とそれ以外の白人に分類され、「外来」者の内容が吟味されるようになった。それが世界の中のフィジーを認識させる一歩になった。世界的な民族自決と脱植民地の流れのなかで、大部分が砂糖黍栽培に従事し、都市部で小規模商業を営む「外来」のインド系住民の存在が、フィジー系住民にとって重要な問題として生起しはじめた。植民地政府のもとでは、インド系住民は政府と争っており、フィジー系住民と直接対立することはなかった。しかし独立の日程をにらみながら始まった政党政治時代から、如何にインド系住民に対処するかが、国際社会の一員としてのフィジーにとっての試練となった。

「民主主義」は世界的な正義である。しかし自らの土地を、たとえ売却によっても、資金力のある民族に奪われる可能性のある「民主主義」とは何であろうか。フィジー人の利益を「至上」のものとして、「外来の民」(インド系住民)にハンディキャップをつけた政治体制を確立しようとしたのが、1987年のクーデターであり、その後の共和国憲法の制定であった。そのフィジー系住民の至上権が保証された状況のなかで、「フィジー人党」(SVT:旧同盟党系)の分裂があり、軍隊の力を背景とし、労働党の支持を得た平民出身のラムブカが首相(=王)となった。

土地の民から「外来王」と考えられた伝統的首長階級出身者だけが、海外に出かけて「外来」の「マナ」を身につけてフィジーを導く時代は終わった。平民(=土地の民)が教育を受け、戦功をあげて自ら「マナ」をつけ、首長階級をも含むフィジー系住民と、「外来」の民であるインド系住民とその他の南太平洋諸島出身者、そして白人系・中国系などによる多民族国家の「首相」

を務める時代になった。

〔注〕

- (1) 外来の首長を無力な存在に変えるには、外来の首長が海岸の沖に停泊したとき、ホスト側の若者が泳いでいってタムプア（鯨歯）を渡すことが必要である。このとき「荒ぶる魂」を穏やかにさせると筆者は考えている。サーリンズは接待の会場でヤングナを飲むときに象徴的に「殺される」と考えている（サーリンズ [1993], p. 125）。またアセセラ・ラヴは、ヤングナは「蘇り」を促すもので殺害を象徴するものではないとの立場に立っている（Ravuvu [1987], p. 338）。
- (2) 春日（[1994], p. 210）もいうように、フィジー語の「マタニトゥ」（matanitu）は「国家」「フィジー人担当省」「地域的な連合・同盟」などを指す。時代によってその表す概念に変化がみられるが、その時代時代の「統治」形態を指す。
- (3) 筆者の調査地ヴィウ島には、先住の3マタンガリと首長ロコ・トゥイ・ヴィウを中心とする征服者側の3マタンガリの二分構造がみられる。大首長を頂く村落にはこの二分構造がみられる。
- (4) それに対して、白人入植者が土地に関して手に入れたのはその「所有権」なのかまたは「使用权」なのか、フィジー人にとってはその西欧的な概念には馴染みがなく定義しようがなかった（Routledge [1985], p. 219）。
- (5) マアフ政府の体制が整うにしたがって、旧タイプの首長たちには戸惑いがあった。彼らは臣下を単なる自分の所有物と考え、酒や武器の支払いに臣下の土地を売っており、それを自分の権利だと考えていた。
- (6) その後、母方の血筋から「トゥイ・ラウ」を名乗ることができたのはラトゥ・スクナであった（1938年）。彼の父方はパウ島の高位の首長の血を引き、名声からいっても「ヴー・ニ・ヴァル」の称号を受ける資格があった。そのような有力な首長が「ラウ王」を名乗りトンガ系住民の権利を保証してくれることは望ましいことであり、歓迎された。しかし彼は即位式をすることもなく、高位の人にもみ許される樹皮布を着ることもなかった。
- (7) 1935年には西部地域で政府の役人（プリ）と伝統的な首長（トゥイ）との間で争いが起こった。このときにはすでに伝統的なまとまりであるヴァヌアの長が自動的に政府の役人になることはなくなっていた。行政区（ティキナ）は地区長官が統治したが、社会的には伝統的な首長が力をもっていた。共同体へのサーヴィスを行うにあたって首長（トゥイ）を無視しては困難な状況を増すばかりであった（Scarr [1980], p. 111）。
- (8) 首長会議（ボセ・ヴァカトゥーランガ）は諮問的役割を果たす伝統的フィジー人指導者層の利益を代表する組織である。植民地時代には植民地政府によって

認められ1970年の独立以後は憲法によって、認められた組織である。1990年の共和国憲法では大統領をこの首長会議が任命する権限をもつ。

- (9) 筆者の調査地出身の平民の地区長官は、伝統的儀礼においては伝統的首長より下座の平民の長老の位置に座っていた。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

- 春日直樹 [1994], 『『土地の民』からみた国家の形成と変容—フィジーのマタニトゥ概念を中心にして—』(熊谷圭知・塩田光喜編『マタンギ・パシフィカー—太平洋島嶼国の政治・社会変動—』アジア経済研究所)。
 サーリンズ, マーシャル (山本真鳥訳) [1993], 『歴史の島々』法政大学出版局。
 橋本和也 [1993], 『フィジー』(綾部恒雄監修, 信濃毎日新聞社編『世界の民』〈下〉明石書店)。
 ホカート, A. M. (橋本和也訳) [1986], 『王権』人文書院。
 ワースレイ, ピーター (吉田正紀訳) [1981], 『千年王国と未開社会』紀伊國屋書店。

〈外国語文献〉

- Alley, Roderic [1986], "The Emergence of Party Politics," in Brij V. Lal ed., *Politics in Fiji: Studies in Contemporary History*, Sydney, London, Boston: Allen & Unwin.
 Bain, Atu & Baba Tupeni [1990], *Bavadra: Prime Minister, Statesman, Man of the People*, Nadi, Fiji: Sunrise Press.
 Burton, J. W. [1910], *The Fiji of Today*, London.
 Calvert, James [1983], *Fiji and the Fijians*, 2 Vols., Suva: Fiji Museum (First published in London in 1858).
 Capell, A. & Lester, R. H. [1941], "Local Divisions and Movements in Fiji," *Oceania*, Vol. XI, No. 4.
 Capell, A. [1971], *A New Fijian Dictionary*, Government of Fiji.
 Carey, Jesse [1891], *The Kings of the Reefs. A Poem*, Melbourne.
 Clunie, Fergus [1977], "Fijian Weapons & Warfare," *Bulletin of the Fiji Museum*, No. 2.
 Dean, Eddie [1988], *Rabuka No Other Way*, Suva Fiji: Marketing Team International Ltd.
 Deane, W. [1921], *Fijian Society: Sociology and Psychology of the Fijians*, London: Macmillan.

- Derrick, R. A. [1974], *A History of Fiji*, Suva: Colony of Fiji at the Government Press. [初版1946]
- France, Peter [1966], "The Kaunitoni Migration: Notes on the Genesis of a Fijian Tradition," *The Journal of Pacific History*, Vol. 1.
- Gardere, Françoise & David Routledge [1991], *Histoire de Macuata*, Fiji: (History of Macuata) Archdiocese of Suva.
- Hau'ofa, Epeli [1987], "The New South Pacific Society: Integration and Independence," in A. Hooper, S. Britton, R. Crocombe, J. Huntsman & C. Macpherson eds., *Class and Culture in the South Pacific*, Centre for Pacific Studies, University of Auckland and Institute of Pacific Studies, University of the South Pacific.
- Heartly, E. M. [1922], "The Invisible Isle of Burotu," *Transaction of the Fiji Society*.
- Johnston, T. R. St. [1917], "The Burotu of the Lau Islanders," *Transaction of the Fiji Society*.
- Kaplan, Martha [1990], "Meaning, Agency and Colonial History: Navosavakadua and the Tuka Movement in Fiji," *American Ethnologist*, Vol. 17.
- Lal, Brij V. [1986], "Politics since Independence: Continuity and Change, 1970-1982," in Brij V. Lal ed., *Politics in Fiji: Studies in Contemporary History*, Sydney: Allen & Unwin.
- Meller, Norman & James Anthony [1968], *Fiji Goes to the Polls: The Crucial Legislative Council Elections of 1963*, Honolulu: East-West Center Press.
- Nayacakalou, R. R. [1975], *Leadership in Fiji*, Melbourne: Oxford University Press.
- Ravuvu, Asesela [1987], *The Fijian Ethos*, Suva: Institute of Pacific Studies.
- [1988 (1974)], *Fijians at War 1939-1945*, Suva: Institute of Pacific Studies.
- Reid, A. C. [1990], *Tovata I & II*, Suva: Fiji Museum.
- Routledge, David [1985], *Matanitu Power in Early Fiji*, Suva: Institute of Pacific Studies, University of the South Pacific.
- Scarr, Deryck [1980], *Ratu Sukuna Soldier, Statesman, Man of Two Worlds*, London and Basingstoke: Macmillan Education Limited.
- Sutherland, Hon. Wm. [1910], "The Tuka Religion," *Transactions of the Fijian Society*.
- Thomson, Basil [1982], "The Land of Our Origin: Viti, or Fiji," *Journal of*

the Polinesia Society, Vol.1.

Thomson, B. [1895], "The Kalou-vu (Ancestor-Gods) of the Fijians," *Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, Vol.24.

Wood, Harold [1978], "Overseas Missions of the Australian Methodist Church," Vol. II (Fiji), Australia: Aldersgate Press.